

映画「二人のローマ教皇」(Zenit, 2020年2月5日)

サン・クリストバル・デ・ラス・カサスの名誉司教フェリペ・アリスメンディ・エスキベル

見る

色んな人たちから『二人のローマ教皇』という映画についての意見を求められたので、その映画を見ることにした。私は映画の評論家ではないが、魅力的な仕方で興味のあるテーマを扱った完成された映画と思った。しかし、映画の冒頭でこれは事実に基づいていると言っているが、私にはドキュメンタリーというより、むしろフィクションと仮定が一杯の小説のように見えた。



ストーリー全体が、教皇ベネディクト16世と、教皇に選出される前のホルヘ・ベルゴリオ枢機卿との、仮定の会見を中心に進んでいく。その会見がどこかで行われたのかは証拠がない。

この映画は、フランシスコ教皇を褒めるために、ベネディクト16世をいやしめるのだが、そのやり方は不正である。確かに二人は異なるタイプ、異なる性格の教皇であるが、二つの異なる教会でも、教皇としての奉仕において異なるものでもない。これはなにも驚くことではない。常に教皇は一人一人が異なった。ちょうど四つの福音書が異なっているが、それぞれ自分のスタイルによって唯一のイエスの福音書であるのと同じである。マルコは、ヨハネとはとても異なるが、二つともイエスに忠実に従っている。イエスと洗礼者ヨハネは、生き方において大きな違いがあるが、二人とも唯一の神の国に奉仕した。

たとえば、ベネディクト16世が当時の諸教皇の慣習に従ってサンダルを履かれたが、フランシスコは普通の靴を使われるという事実でもって、前者を非難し、後者を称えるのは誤りであろう。それは異なる時代と場所の「慣習とやり方」なのである。イタリアあるいはドイツと、アルゼンチンやラテン・アメリカ一般とは異なる。西欧の高位聖職者とラテン・アメリカの高位聖職者の生活や仕事の仕方、人々との接し方は異なるのである。しかしながら、私たちは皆一つの教会に属する、唯一のイエス・キリストから派遣された弟子である。

ラテン・アメリカ人にとっては、フランシスコがとても庶民的な生き方をされるのは普通に思える。なぜなら、それはラテン・アメリカのスタイルだから。教皇フランシスコのそのやり方を欧州の若干の場所ではまだ残っている貴族的な社会では意味を失っていない儀礼作法を取り去ったと批判する人がいる。しかし、それは二義的なことで、本質的なことは変わっていない。二人の教皇はどちらも深くイエス・キリストとその教会を愛している。ただ、その仕方が異なっているのだ。

私はベネディクト16世とラッチンガー枢機卿の時代から、何度となくお話する機会を持った。それゆえ、ベネディクト16世が素朴、謙遜、深い人格的調和、人への優しく紳士的な接し方、聖職者としての正しい意向と責任感をもつ方であることを証言したい。非凡な方である。ベネディクト16世は、あの時代に私たちが必要としていた教皇であった。その後で、私にとっては予想もしていなかったことだが、フランシスコという贈り物が来た。教会を導いているのは聖霊である。これらの偉大な教皇を持つ

た私たちはなんと幸せ者か。それ以前の教皇にも同じ事が言える。私は自信を持ってそう言う。

考える

聖ヨハネ・パウロ2世から教皇フランシスコまで、教皇職の行使のあり方を改革しようという真摯な努力が見られる。すでに聖パウロ6世が先鞭を付けている。「教会は自分自身についての自覚を深めなくてはならない。自分の中に特に神が秘めたもうた意図を深く考えねばならない。・・・このことをはっきり自覚したとき、そしてその自覚を実行に移そうとするとき、自然と二つの教会の姿を比べてみないわけにはいかない。一方にはキリストが望み、また愛したもうた教会の理想の姿がある。それはキリストの清らかな汚れない花嫁である（エフェソ、5、23）。他方には、今日教会が示している現実の姿がある。・・・そしてここから、寛大に、そしていわば空しく時間を失うのを恐れて、革新を行う必要が、すなわち数々の欠点を是正する必要が浮かび上がってくる。こうした欠点をあの自覚が、いわば内面の究明というか、キリストが残したもうた模範に自らを照らし合わせて、見出しました退けるのである」（聖パウロ6世、『エクレジウム・スアム』、東門陽二郎訳、9~11頁）。

この延長戦上に教皇フランシスコの次の言葉がある「他人に求めることは、まず自分自身で実行しなければなりませんので、私も教皇職の回心を考えねばなりません。ローマの司教としてのわたしの務めは、イエス・キリストが教皇職に与えようとした意味と、現代の福音化が必要としているものにより忠実にこたえるための助言に、開かれたものでなければなりません。教皇聖ヨハネ・パウロ2世は『首位の権限の本質はなにも損なわないで、しかもなお、新しい状況に対応できる何らかの形式』（*Ut unum sint*, 95）を見出すために力を貸して欲しいと願いました。この点において、わたしたちはあまり前進していません。教皇職も普遍教会の中央機構も、司牧的な回心への呼びかけに耳を傾けねばなりません。・・・過度な中央集権主義は、教会生活とその宣教する力の助けになるどころか、それを複雑にしています」（『福音の喜び』32）。

行動する

教会を導くのは聖霊である。聖霊にお願いしよう。その賜でもって、ベネディクト16世と教皇フランシスコを助け、彼らとともに我々も必要とされる教会の刷新の道を進み、イエスの道とスタイルに忠実であり続けることが出来るように、と。